

# 図画工作と保育

## —ゼミナールからみえてくるもの—

竹永 亜矢 (近畿大学九州短期大学)

梶原 真紀子 小島 柚麻 藤春 花梨 森本 美保

'Art and Craft' and 'Childcare'  
— Insights from the Seminar —

Aya Takenaga (Kyushu Junior College of Kindai University)  
Makiko Kajiwara Yuma Kojima Karin Fujiharu Miho Morimoto

### 要旨

近畿大学九州短期大学 美術表現研究室竹永ゼミナールは 2014 年を 1 回生として本年度で 11 回生となる。本稿では図画工作（造形表現）、保育、子育てについてアンケートを講じた内容を報告する。

本学保育科においては美術領域の教科名として「造形表現」を用いているが、保育現場も含め「図画工作」が一般的で伝わりやすいため、本稿では「図画工作」を用いている。

キーワード：図画工作，保育，ゼミナール，子育て，子ども

### Abstract

The Takenaga Seminar of the Art Expression Research Laboratory at Kyushu Junior College of Kindai University began with its first group of students in 2014, and this year marks the 11th group.

This paper reports on a survey on topics such as 'Art and Craft' (creative expression), childcare, and parenting.

In our college's Department of Early Childhood Education, the term 'Creative Expression' is used as the subject name in the art domain. However, since 'Art and Craft' is more commonly understood, including in childcare settings, this paper uses 'Art and Craft' for clarity."

Keywords : art and craft, childcare, seminars, parenting, children

### 1. アンケート対象者について

竹永ゼミナールの卒業生 4 名を対象として実施。全員が保育士として就職し、2024 年 9 月時点で在職者が 2 名、結婚、子育て中 2 名となる。

#### ゼミナール所属時期／勤務歴【保育所・保育園】

- ・梶原 真紀子 2016 年／勤務歴 7 年 6 ヶ月  
2017 年～【夏吉保育所】
- ・藤春 花梨 (旧姓 行徳) 2016 年／勤務歴 6 年  
2017 年～2023 年【あかつき保育園】

- ・小島 柚麻 (旧姓 倉成) 2016 年／勤務歴 5 年  
2017 年～2022 年【感田保育園】
- ・森本 美保 2020 年／勤務歴 3 年 6 ヶ月  
2021 年～【浄蓮寺保育園】

### 2. アンケート項目

- 1) 卒業後、保育の現場で働き感じたこと
- 2) 「子育て」についてあなたの意見を聞かせてください
- 3) 「図画工作」について、ゼミナールでの経験や保育での図画工作（絵画・ねんど）などについて

てあなたの意見を聞かせてください

- 4) 自由記述 学生時代・現在・これから、について自由に書いてください

### 3. アンケートへの意見

#### 1) 卒業後、保育の現場で働き感じたこと

- ・保育士一人ひとりの仕事量、責任が多い。
- ・学生の時に考えていた保育士像と現実が離れすぎている。
- ・子どもたちに対しては第2の母のようなつもりで可愛がりながらも、一生の性格がほとんど決まってしまう6年の期間を預かっているという気持ちで接していた。
- ・大学の授業や実習で言われ続けていた「子どもに寄り添う」という意識は何よりも重要であると思う。その理由として保育士をしていた園での経験がある。園に来ると保育室をすぐに出ていってしまう子どもがいた。日ごろの様子から気持ちを理解してかかわる必要性を感じ、そのことを意識しながらその子どもの気持ちに寄り添うように努めた。その結果、自分が声をかけるとコミュニケーションが取れるようになり、以前は保育士が声をかけても聞く耳を持たないことが多かったその子どもが保育室に戻って来てくれることが日常になった。そのようなかわりが認められて園長先生から2年間、専門の保育士としてその子どもに寄り添うように依頼された。

「子どもに寄り添う」ことの大切さを子どもから学ぶと同時に「寄り添う」とは、なんでも子どもの心に入り込むこととは違うということも感じた。

「子どもに寄り添う」には子どもの様子を見守る余裕が必要だと思う。

- ・保育科学生の頃は保育士という仕事が輝いているイメージだった。いざ現場で働くと、子どもに合った保育の仕方、気になる子どもへの対応、保護者とのかわりなど、大変な仕事であることを知った。特に行事前などは寝る時間を削って衣装作り、卒業前のアルバム作りなど大変だが、全てが終わった後保護者から感謝の言葉を聞くと仕事のやりがいを感じてこれからまた大変なことがあっても乗り越えることができると思った。

- ・子どもが環境や気持ち、保護者の生活環境の影響を大きく受けていることを実感する。また、子どもの言動から友人同士の流行や保護者の家での会話、保育士の言動をよく見ているところが興味深く感じる反面、自分の言葉、態度、保育がどれだけ子どもたちに影響をあたえるのだろうかを考える。

- ・子どもが何かできるようになって自信につながった時、それがきっかけとなって色々なことに挑戦できるようになったり、態度が変わったり、子どもの成長はすごいと感じている。

- ・子どもによって対応も変わり、その日のその子どもの気持ちにより「前の時はうまくいったのに」となる事もあり、難しさを感じている。



写真 2016 ゼミナールから  
梶原真紀子・行徳花梨・倉成柚麻  
近畿大学九州短期大学附属幼稚園にて  
「土粘土による造形と子どもの粘土あそび」

## 図画工作と保育

### 2)「子育て」について、あなたの意見を聞かせてください

- ・保育士はどの職業よりも創作について考えたり、衣装作りしたりと発想力が必要な仕事だと感じていた。他の仕事も経験した今、どの職業でも発想力は必要であることが分かった。そのためこれから子育てする際、発想力を身に付けられるようなかかわりを持ちたい。
- ・子どもが将来、どのような職業に就いても、人前に立ち、教える立場になることもあるため、子育ての中で子どもが自分の作品を見せに来た時には、どうやって作ったのか、子どもから教えてもらうような姿勢でかかわりを持ちたい。
- ・子どもは親のことを真似て成長しているから、悪いことをした時は、自分自身を見直す必要がある。
- ・社会に出ると「協調性」が何よりも大切と思っている。そのため自分の子どもには兄弟が欲しい。そして色々な人とのかかわりを持ってほしいと考えている。今の時代、何もかも便利で生きやすいようになっているが、経験できること、自分がやりたいと思ったことに積極的に取り組めるよう応援したいと思う。
- ・親という責任の重さを常に感じている。親が話しかけた言葉を覚え、親が行った行動を真似しながら育てていく我が子を見て、何が正しいのか時には間違ったときにその後どうするのか、迷いながら子育てをしている。
- ・「人を育てる」という仕事は一番やりがいがあり、一番難しい事だと子どもを産んで思う。
- ・仕事をしながらの子育てのイメージは“毎日が戦い”である。子育てから家事にいたるまで、毎日様々な義務をはたす中で、身近に子どもの成長を感じることができる点はやりがいにつながるのだと思う。
- ・子どもに「こうなってほしい」「これができるようになってほしい」という思いがあっても「こうすべき」「こうしなければいけない」とかたまってしまくと、保護者（保育者）も子どももお互いにつらくなってしまおうので、おおらかに受け止められる気持ちの余裕は必要と感じている。自分の気持ちと態度を顧みていきたい。

### 3)「図画工作」について、ゼミナールでの経験や保育での図画工作（絵画・ねんど）などについてあなたの意見を聞かせてください

- ・ゼミナールの時間はみっちり作業して、休みの日まで授業になることもあって、学生の時は面倒だと感じることはたくさんあった。だが、保育士を目指す自分が美術表現を研究するゼミを選択したことはベストな選択だったと保育の現場に出て思った。
- ・子どもの表現に寄り添う際、大人の余裕が必要。子どもの様子を見ること（何を作ろうとしているのか、何に繋げようと考えているのか）が大切で、余裕がない先生（いつも怒っているような先生）に子どもは近寄らない。現場に出てそのように感じた時、ゼミナールの中でそれを自然と教わったのだと思った。
- ・ゼミナールで経験した塑造（そぞう）による人物像（胸像）制作は、何気なく取り組んでいたが一番学ぶことが多い体験だった。保育士になって、子どもに粘土を渡すと丸める、縄状にしてへびを作るといったパターンが多かった。人物像制作の体験から立体的にどのような粘土のつけ方をするとよいのかなど、子どもたちが作った丸やへびの形から別の表現へ展開するあそびを提案することで子どもたちの心をつかみとり「こういうものが作れるんだ」という子どもの発想力を育てることができたと思う。
- ・描画の際、制作が進んでいる子どもにはできるだけ声をかけず、手が止まっている子どもには、子ども自身が想像を広げられるような声掛けを意識していた。
- ・卒業して7年、ゼミで行った細かな事は忘れてしまいましたが、粘土あそびは、働いている間も好きで、子どもたちと一緒にあそんでいた。また、授業で行ったアイデアを真似して子どもたちと制作したり、新聞紙を使って洋服を作ったり、楽しんだ事もたくさんある。
- ・園では月ごとに制作（折り紙、バブルアート、手型、足型、はさみを使うなど）を行っているが、子どもは手作りおもちゃ（プラパンで作るキーホルダー）などが好きで、夢中になって絵や字を描いている。その姿から、こどもは物作りが好きなのだと感じる。

## 図画工作と保育



2016年ゼミナールから  
「塑造（そぞう）による胸像制作」



梶原真紀子 作  
「Yuma！」



行徳 花梨 作  
「真紀子」



倉成 柚麻 作  
「先生」



粘土の粗付け

・粘土あそびでは、子どもが一番作りやすい形としてへビ（縄状）や丸を作る子どもが多いと感じる。へビの形を作った後は、それをグルグルと丸めて「先生、うんち」と保育者にアピールする。制作が苦手な子どももいるが諦めずに取り組んでいる。  
・保育での図画工作では、何かを作る（描く）過程が大事と思い活動している。同時に完成後子どもも

喜んでいるので、その活動が「楽しかった」と思えるように保育者の反応も返していけたらと考えている。

・学校の授業で行った技法を「こんな風に取り入れよう」や「あれをしてみたら面白いのではないか」と参考にしている。

・園で土粘土あそびをする際、子どもに作り方を教えることはないがゼミナールで塑造（そぞう）を体験したことは活かされていると思う。

・描画のテーマ設定の際、子どもが描いてみたいと思えるような導入（お話し）をする事と、描いた後に子どもにお話し（絵について）してもらおうが、もっと子ども自身のお話を引き出せないかと思っている。

・「技法のあそびを楽しんでほしい」と「子どもの自由な発想・表現」のバランスを上手くっていきたい。

・子どもの絵の成長が見られた時（スクリブルを描いていた子どもがいつの間にか顔のような形を描き始めている）は嬉しくなり、同時に面白さも感じる。

・これからの課題として、もう少し自由に、気楽に土粘土や造形あそびができる環境設定をしたいと考えている。また、気になった技法や思いついた造形あそびは、まず自分が楽しんで取り組みたい。

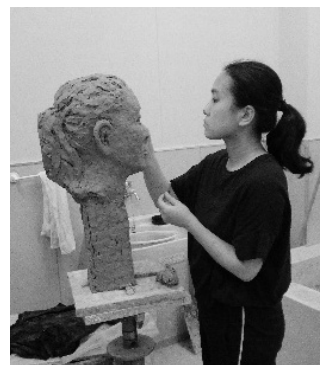


写真 2020年ゼミナールより  
「塑造（そぞう）による自刻像の制作」  
森本美保 作「わたしのかお」右写真

#### 4) 自由記述

学生時代・現在・これから、について自由に書いてください

##### 学生時代

- ・高校の授業は何を学んだのか自分では理解できていないが、短大（保育科）の授業はすべて自分のための学びだった。振り返って思うことは、もう少し一生懸命取り組むべきだったと少し後悔している。
- ・学生の時は、特に何も考えず保育士資格が取れて卒業できればよいと思っていた。保育現場のことは就職して学んだこともたくさんあったが、もう一度授業を受けられたらと思うこともある。

##### 現在・これから

- ・現在は育児に追われ他の子ども（保育園の子ども）のことまで考える余裕がなく、一度保育士を離れているが「子どもが好き」という気持ちは変わらない。そのためいつかまた保育士という素晴らしい職業に戻れたらと思っている。
- ・復帰について考えると、子どもが大学に行くまでは経済力が必要であるため、保育士の仕事量に見合った収入が得られると良いと思う。保育士として働いている方々はどうしてもやりがいという部分で仕事をしている方が多いように感じていた。自分が復帰する時には、働きやすい保育園がひとつでも多く増えてほしい。これは私の願望です。
- ・これまでネガティブな感情になることがたくさんあった。色々な経験をした今、頑張れば必ず良い事が返って来る。小さな夢でも大きな夢でも思い続けて信じていれば思いが叶う事をこれまでの経験で知ったから、自分を信じて挫けず取り組んでほしいと色々な人に伝えたい。
- ・美術表現研究のゼミでよかったと思う。今も年に1回ゼミナールの仲間と会って現状報告や保育の話をしているのが楽しい。結婚したり子どもができたり、嬉しい報告があって自分も幸せを感じる。

#### 4. まとめ

今回、卒業後8年目と4年目を迎えている卒業生の意見をまとめた。

保育現場での仕事、退職、結婚、出産、子育てとそれぞれが人生のステージを歩む中で学んだことや経験から伝えられる卒業生の考えや思いを知り、在学中の学びと卒業後の支援について重要な手がかりを得ることができた。

ゼミナールで取り組んだ図画工作に関する項目では、素材との付き合いから自分で発見したこと、楽しさや自分の表現への尊重といったものが自然と身に付き、子どもたちとの活動に表れている。保育の現場で新しい問題が起きた際、その問題にいかに向き合うか、その対処方法の選択について知らず知らずのうちに指導者の背中を見て身に付けたものが反映されているのである。

身近な人の姿を見て育つことは、保育も大学での学びも同じである。このことを念頭に置いてこれからもゼミナールに取り組みたい。

今後の課題として、保育士が集える場を設けることが挙げられる。卒業後、気軽に意見や考えを共有し共感できる場を設けることで仕事や生活でのモチベーションを維持する手助けになる。また、保育の現場から離れたとしても、子育てや仕事に向けた情報交換の場ともなり、それぞれの立場を超えた交流の場として互いの現在を知る機会ともなる。

保育士は、保育科の在学生にとってもっとも響くメッセージを持った存在であることから、それぞれをつなぐ試みとしてゼミナールにおいては研究室への里帰りと在学生との交流を図っている。

交流会は先輩と後輩、ゼミナールで同じ研究テーマに取り組む経験など共通した話題があるため、それぞれが質問や助言を受ける機会となっている。

もうひとつの取り組みとして保育科1年生「幼児と造形表現」授業において、保育士として勤務しているゼミナール卒業生を招いての講演会を開催している。

本年度は浄蓮寺保育園（直方市）の保育士森本美保先生を招いて子どもの主体的あそびと創造的活動について「創造保育でのあそび」をテーマに講演会を開催した。

## 図画工作と保育

講演を受講し、筑豊地区において永年にわたりあそびを通して創造性と自主性を育む浄蓮寺保育園の取り組みと子どもたちの表現力を目の当たりにして、あそびの大切さや子どもへの支援について学ぶ貴重な体験となった。



2024年6月開催 講演会  
テーマ「創造保育でのあそび」



「動物園に行ったよ。そうだ、動物村を作ろう！」  
粘土あそび 4歳児 (浄蓮寺保育園)



「お馬さんになってあそぼう」荒馬作り  
4歳児 (浄蓮寺保育園)



p. 82 「どんと大きなゾウさん お鼻も長いよ」  
出典：島崎充／島崎創造保育研究会編（1996）  
『その気になって 創造保育の子どもたち』海鳥社

これからもゼミナールが保育の現場とこれから保育士になろうとする学生たちをつなぐ場所“home”になることを願って交流を持てる方法と場所作りについて考えていきたい。

### 謝辞

ご意見や写真を提供していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

### 文献

島崎田鶴子／山田真理子（1992）『いま「創造保育」を 島崎田鶴子の保育への提言』海鳥社

島崎 充／島崎創造保育研究会編（1996）『その気になって 創造保育の子どもたち』海鳥社